

筑波山地域ジオパーク認定記念

水が作った石岡



平成29年

5月2日(火)～7月30日(日)

入館無料/月曜休館(祝日の場合は翌日)

午前10時～午後4時30分

石岡市立ふるさと歴史館

石岡市総社1-2-10 石岡小学校地内



水が作った石岡

平成 28 年 9 月 9 日に「筑波山地域」が日本ジオパークに認定されました。

ジオパークとは、貴重な地質や地形を「保護」し、同時に持続的な開発が可能な範囲で教育や観光に「活用」していくことを目的とした制度です。日本国内のジオパークは、2017年3月時点で全国に43ヶ所あり、それぞれの地域の特徴を活かして活動しています。ジオパーク認定は、筑波山周辺地域の地形や地質、あるいはこれらによって育まれてきた文化が全国的に見て貴重な守るべきものであり、また誇るべき地域資源である、ということを示しています。

今回は筑波山地域の日本ジオパーク認定を記念して、筑波山や霞ヶ浦がもたらすジオの恵みである「水」に着目しました。ジオパークではジオの成り立ちに注目が集まりがちなので、今回の展示ではジオと地域文化の関係に焦点を当てたいと思います。



筑波山地域ジオパークの基礎知識



テーマ・石岡のジオサイト紹介

筑波山地域ジオパークは石岡市，つくば市，笠間市，桜川市，土浦市，かすみがうら市の6市で構成されています。

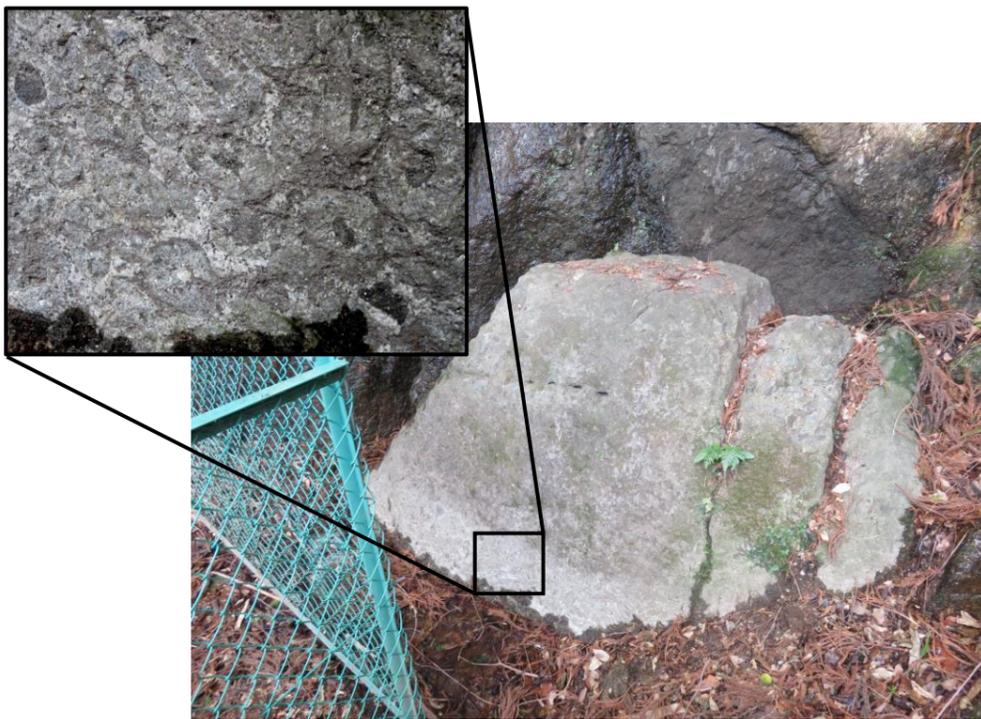
テーマは「関東平野に抱かれた山と湖～自然と人をつなぐ石・土・水～」であり、「筑波・鶏足山塊ゾーン」，「霞ヶ浦ゾーン」，「山と湖を繋ぐ平野ゾーン」の3つのゾーンで形成されています。

石岡市内のジオサイトとしては，球状花崗岩が観察できる峰寺山や霞ヶ浦の主要な港であった高浜地区などがあります。



▲ 筑波山地域ジオパークの範囲

筑波山地域ジオパークパンフレット



▲ 球状花崗岩

玉子状の石英や燐灰石が見られる特殊な花崗岩。

国内では石岡の峰寺山を含め3箇所でのみ見られる。



▲ 高浜神社

高浜は常陸国府の外港であったとされ，霞ヶ浦水運によって栄えてきた。

常陸国風土記と水



古代より常陸国は水の豊かな場所として認識されてきました。奈良時代に編さんされた『常陸国風土記』には、常陸国の語源の一説として「衣袖漬の国」という話が挙げられています。日本武尊の東征の際、常陸国造が新治の県（今の笠間市や桜川市北部など）で新しく井戸を掘ったところとても澄んだ水が湧きました。その清らかさを賞賛して日本武尊が水をすくおうとしたところ袖をひたしてしまいました。袖を「ひたす」から「ひたち」になったのだそうです。

この他にも、常陸国風土記の中には井戸や泉に関する記述がいくつも見られます。このことは水の確保が重要な意味を持っていたことを示しています。1つは井戸が生活の基盤であり、集落を作るにあたって中心となっていたということです。もう1つは、皇族と結びついていて語られていることから、朝廷による東国支配の象徴だということです。水の支配による王権の確立については、古事記の海幸彦・山幸彦の神話にも見て取れます。常陸国風土記でも古事記と同様に、大和朝廷の正当性を示す伝説として井戸や泉の逸話が記録されたのでしょう。



三村から玉里を望む

常陸国風土記・茨城郡の項に旧玉里村の語源に関する記述があり、井戸に関係している。

その他にも新治（新治郡）・角折の浜（香島郡）も井戸に関係した地名である。

茨城郡は水が美味しい？

常陸国風土記では、石岡の周辺も水と共に語られています。

茨城郡の項では、^{くにぶり}風俗の^{ことわざ}諺（地域の特徴を示す慣用表現）として「水依りの茨城の国」という言い回しが紹介されています。「水依りの茨城の国」の意味に関しては諸説ありますが、恋瀬川の存在や常陸国風土記内に井戸や泉の記述が多いことを根拠に「甘（ウマ）き水のある茨城」であるとする説があります（東洋文庫説）。どのような解釈が正しいのかは残念ながら断定できませんが、水の字が含まれていることから、茨城郡の特徴を語る上で水が重要な要素であったことは明らかです。

また、同じ茨城の項では、春は花咲き乱れ、秋は紅葉の見事な場所として高浜が紹介されており、霞ヶ浦に舟を浮かべて楽しむ人々の様子が読み取れます。また、商人や農民が小舟で行き交っているとあります。高浜は常陸国府の外港であったとされており、風土記の記事からは様々な人が行きかう水上交易の拠点として栄えている様子がうかがえます。



慶應4年高浜神社奉納絵馬

（高浜神社所蔵）

江戸時代末期の高浜の様子が描かれている。

霞ヶ浦に多くの舟が浮かび、湖岸の町にはいくつもの蔵が建てられている。

高浜は霞ヶ浦水運の主要な港として、常陸国風土記が編纂された奈良時代から1000年以上繁栄してきた。

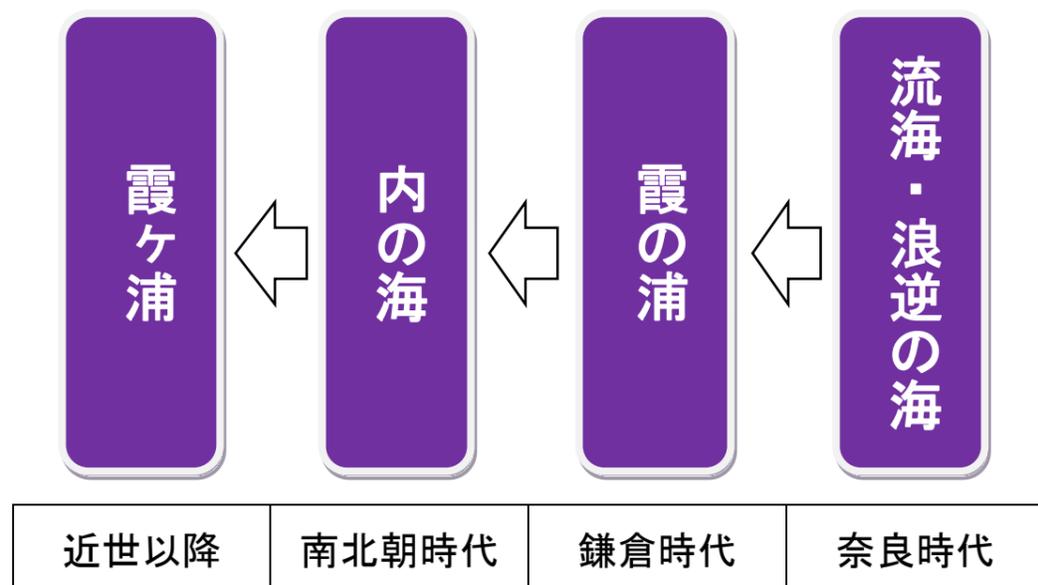
霞ヶ浦の名前

霞ヶ浦の地質学的な成立や形の変化は、いくつかの本やパンフレットに書かれているので、ここでは人々が霞ヶ浦をどのように捉えていたのかを名前の変化から見ていきます。

まず、古代の呼び方ですが、常陸国風土記には“^{ながれうみ}流海”，万葉集には“^{な さか}浪逆の海”とあります。流海は流れが絶えないことを，浪逆は太平洋の波がさかのぼって入ることを表しています。また，流海では範囲が広すぎるので，“高浜の流海”などと地域ごとに区切り呼称されていました。

中世，鎌倉時代には，拾遺愚草などの歌集の中で“霞の浦”と呼ばれています。これは霞がかかっているように波静かであることを表しています。また，南北朝時代に書かれた神皇正統記では“内の海”と呼ばれています。これは太平洋を外と捉え，それに対する内陸の海だからです。

江戸時代になると土砂や川の水が大量に流れ込み，内の海は分断され湖に変わります。分断された湖のうち，内陸側を“霞ヶ浦”や“西浦”，太平洋側を“北浦”と呼ぶようになりました。



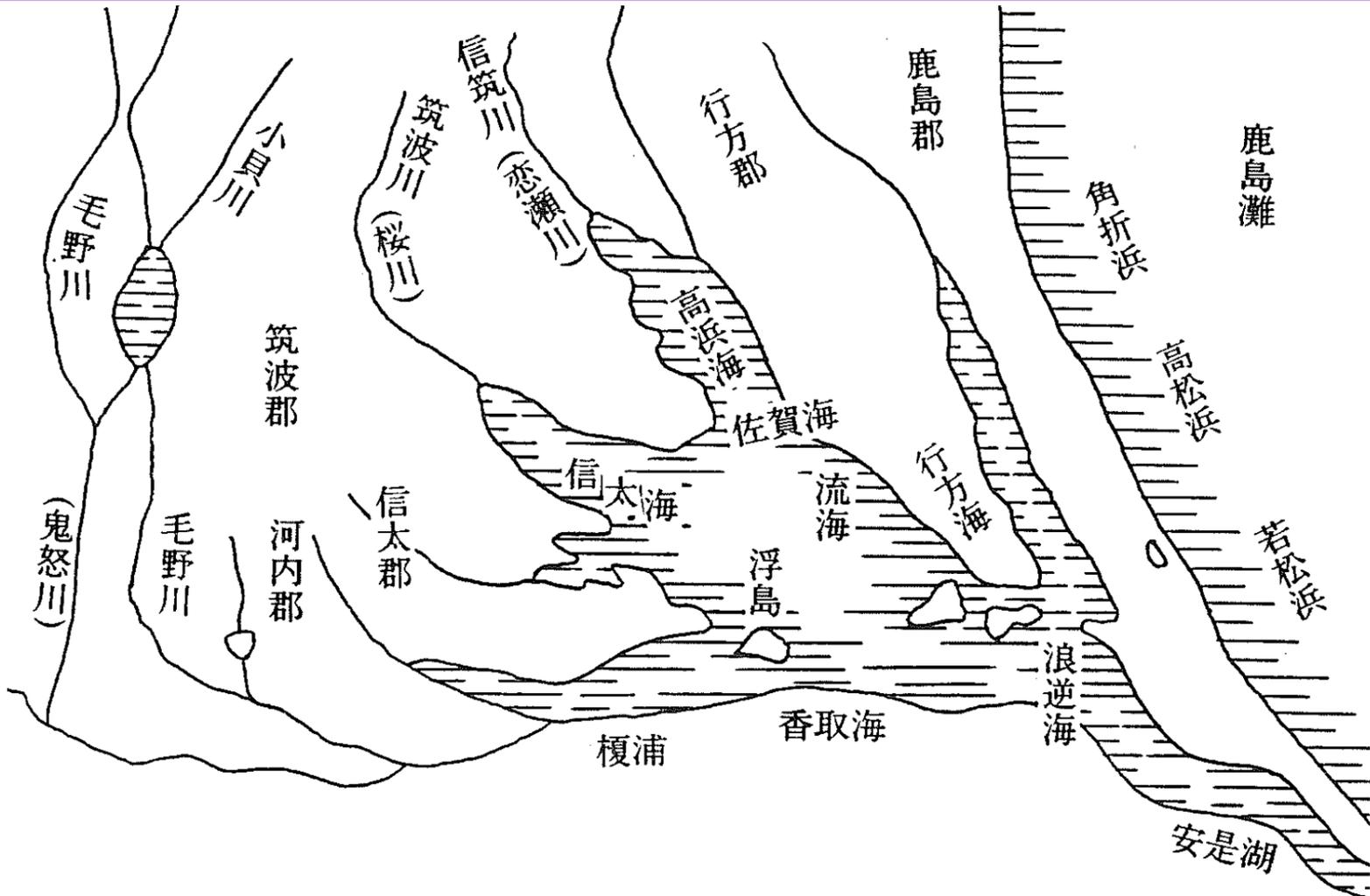
霞ヶ浦の名前の変遷

霞ヶ浦の名前は，時代ごとに水面の様子や位置によって様々に変化してきた。

古記録上の呼び名を見ていくと，昔の人が霞ヶ浦をどのように捉えていたのかが見えてくる。

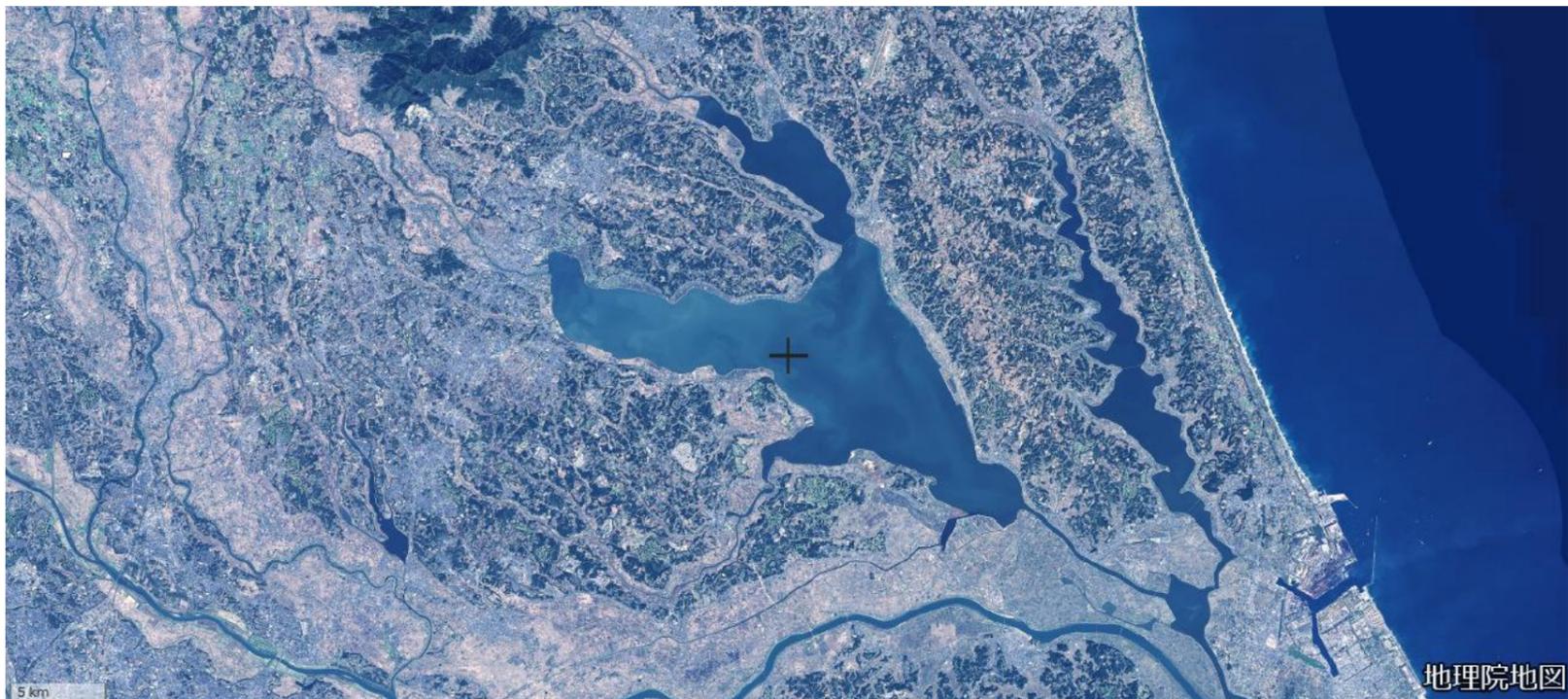
霞ヶ浦の変化

人の力で湖になる



古代霞ヶ浦地図 石岡市史上巻,p.88.1979

江戸時代以前の霞ヶ浦は銚子口から内陸深くまで入り込んだ内海だった。



現在の霞ヶ浦 国土地理院・電子国土基本図

利根川の東遷は江戸の水害を減らすための公共事業として江戸時代に行われた。

この工事によって榎浦や香取海は埋まり、大量の淡水が流れ込むことで海から湖へと変わった。

湖としての霞ヶ浦の誕生には、人の力が大きく関係しているのである。

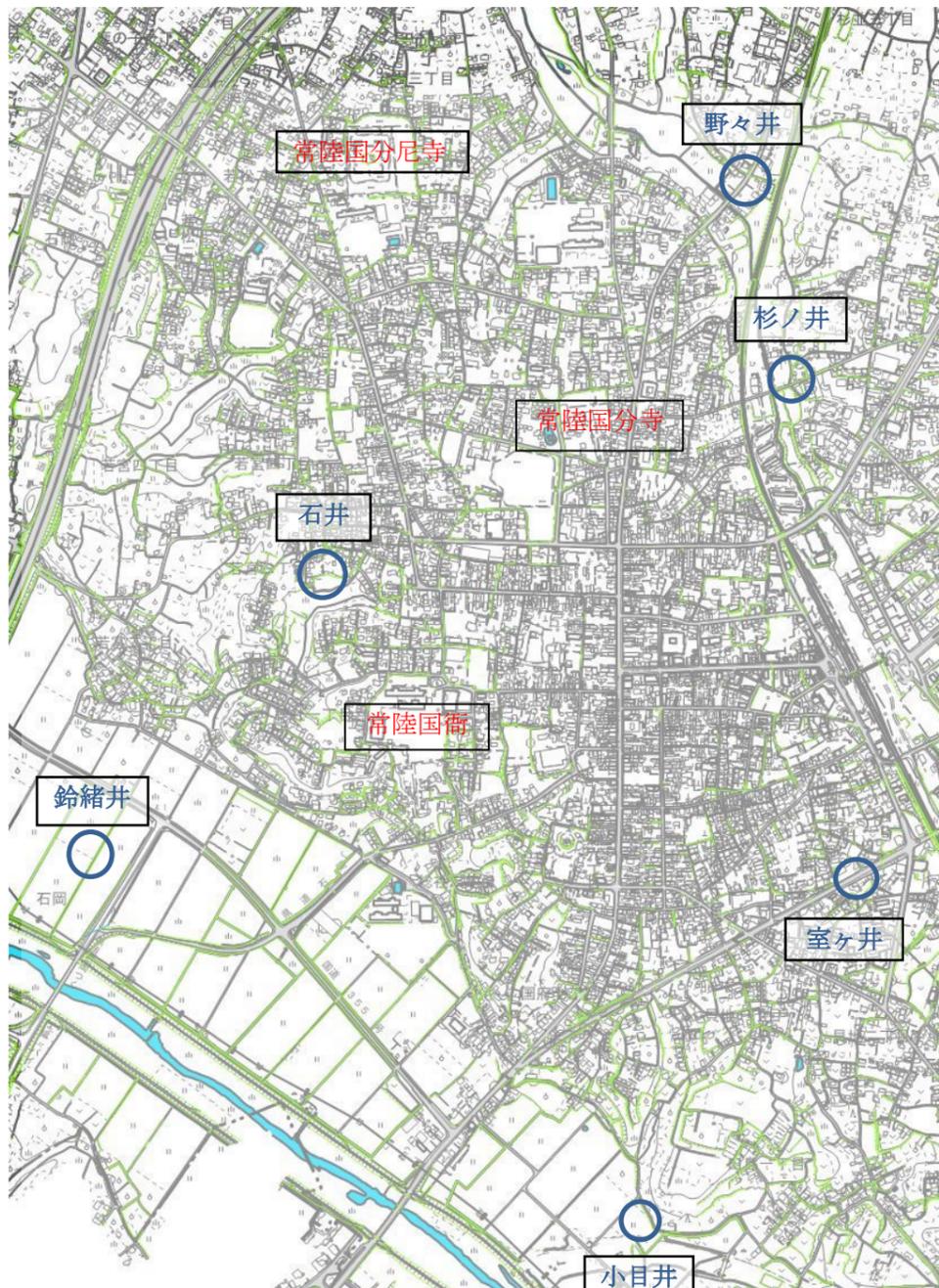
府中六井



今も残る神聖な井戸

中世府中と水の恵みを表す伝説として、府中六井があります。六井は「野々井」「室ヶ井」「小目井」「石井」「鈴緒井」「杉ノ井」であると言われており、常陸国府を囲むように位置します。ただし、資料によっては北ノ谷のホチ水や田端井などが入ることもあります。

かつては水質の維持のため周辺の農作業が禁じられていたというほど、府中六井は手厚く守られてきましたが、近年の開発でいくつかの井戸は姿を消してしまいました。しかし、小目井、杉ノ井、石井の3箇所は地元の方々の協力もあり今も残されています。



府中六井地図

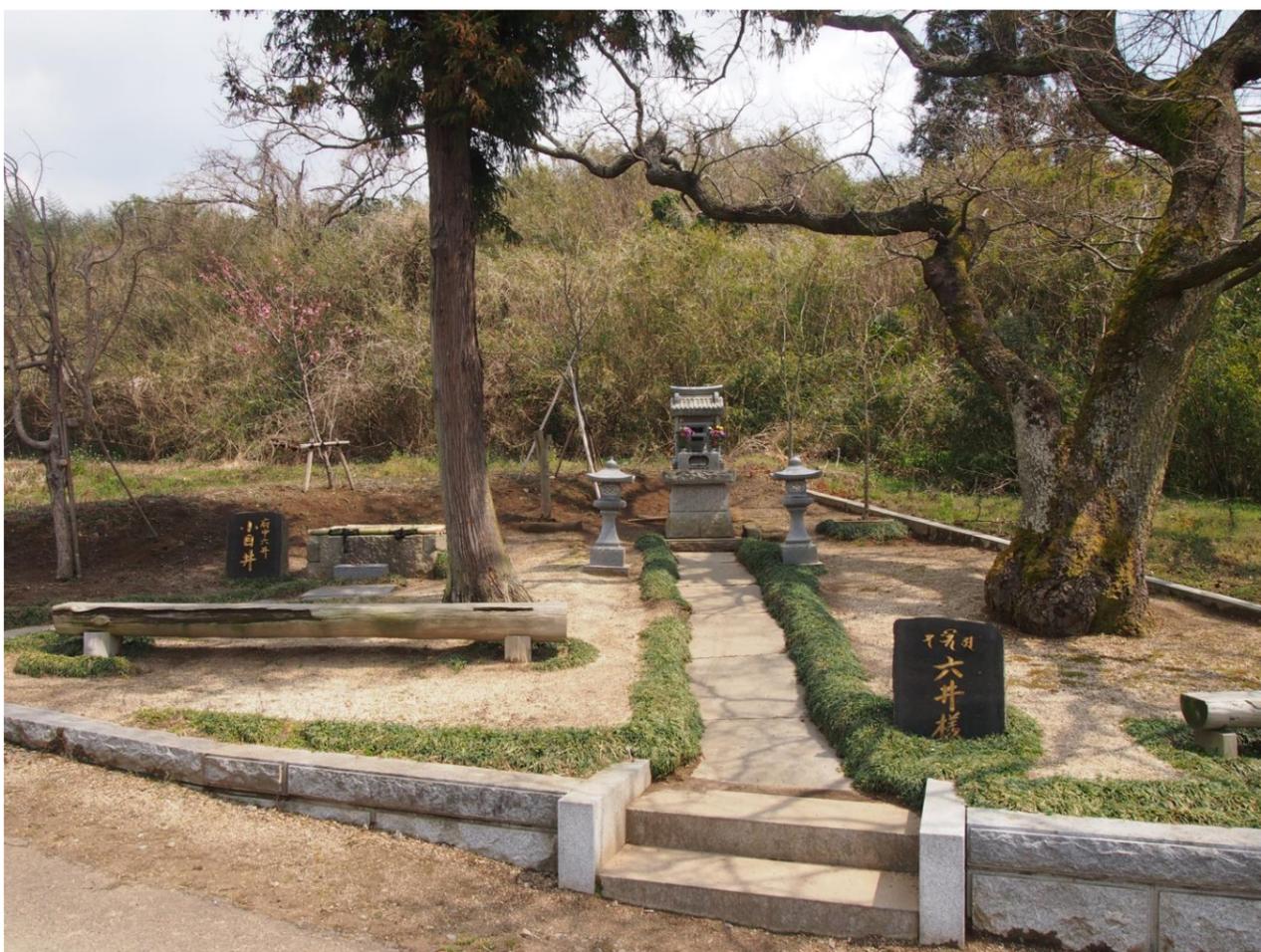
府中六井の存在は、石岡が質・量ともに十分な水が確保できる地域であったことを示しています。水に困らないということは、農業などの生活が安定していたということです。また、良質な水の存在は、水の質に大きく左右される酒や醤油の醸造業の展開を可能にしました。豊かな水が確保できたことは、以後の石岡の発展を支える基礎になりました。

病気も洗い流す清らかな水



府中六井に関する記録は、江戸時代半ばに書かれたとされる『府中雑記』に残っています。その中には、「税所近衛所等の六人、祭事を行う時、此六井にて垢離を為すと云」とあります。この伝説が事実であるかはわかりませんが、少なくとも江戸時代の人々は府中六井をととても清らかなもの、神聖なものとして特別視していたことがわかります。

また、府中六井の清らかさを示す話として、その水で目を洗えばたちまち眼病が治ってしまうという言い伝えがあります。六井の周囲には薬師如来が置かれていたそうで、その面影は石井が「石井薬師の井戸」と呼ばれている点や小目井の薬師堂に見ることができます。かつての六井信仰は石岡近郊に止まらず、県内各地から参拝者が訪れにぎわったそうです。



小目井 田島一丁目

中央の薬師堂にかつての信仰の面影が見られる。

府中六井

石井・杉ノ井



石井 若宮二丁目

府中六井の中でも往時の姿をよく残している。



杉ノ井 杉の井

中央には弘法大師が奉られている。

霞ヶ浦水運



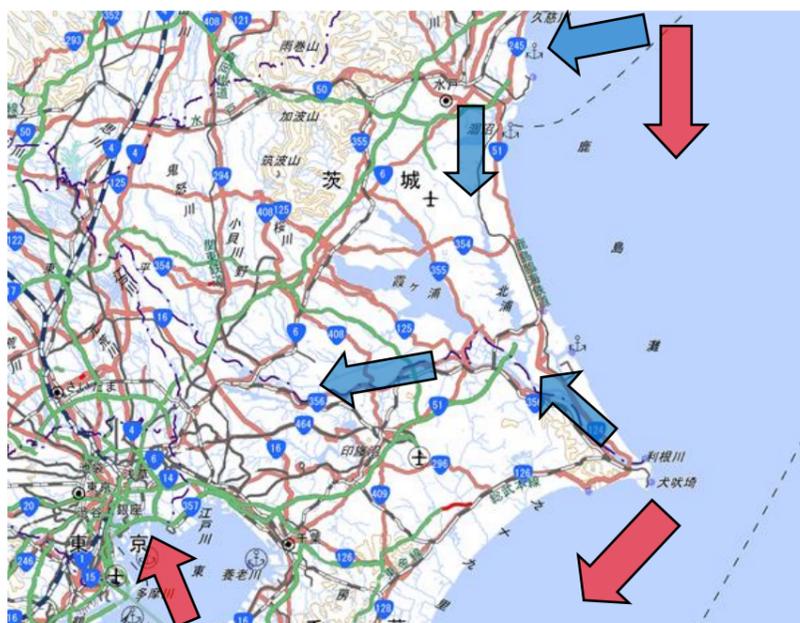
水の恵みとしてもう1つ欠かせないことに、霞ヶ浦水運があります。

風土記に見られるように、霞ヶ浦の交易は古代から行われ、沿岸集落を発展させました。常陸国府では14世紀前半頃から六斎市と呼ばれる定期市が開かれており、水運を利用して各地の商品が集まったと考えられます。



中世は霞ヶ浦が内陸まで入り込んでおり、国衙のすぐ近くまで舟が入れた。水運の便や国衙・総社宮の位置、目印となる竜神山の存在などから、宮部周辺が市の推定地の1つとなる。

江戸時代の頃になると、霞ヶ浦水運は江戸への年貢米輸送に利用されます。効率を優先すると太平洋を通り房総半島を迂回する『大廻し』か、銚子口から利根川を遡上するルートになりますが、外洋は風や波の影響が大きく、海難の危険性が高くなります。対して霞ヶ浦などの湖や川を利用する『内川廻し』ルートは、途中で陸路をはさむため効率はよくありませんが、風待ちや海難の危険性が少ない安全なルートでした。高浜は内川廻しの港の1つとして利用され栄えました。



選択①
太平洋ルートか
内川廻しルートか

選択②
利根川ルートか
大廻しルートか

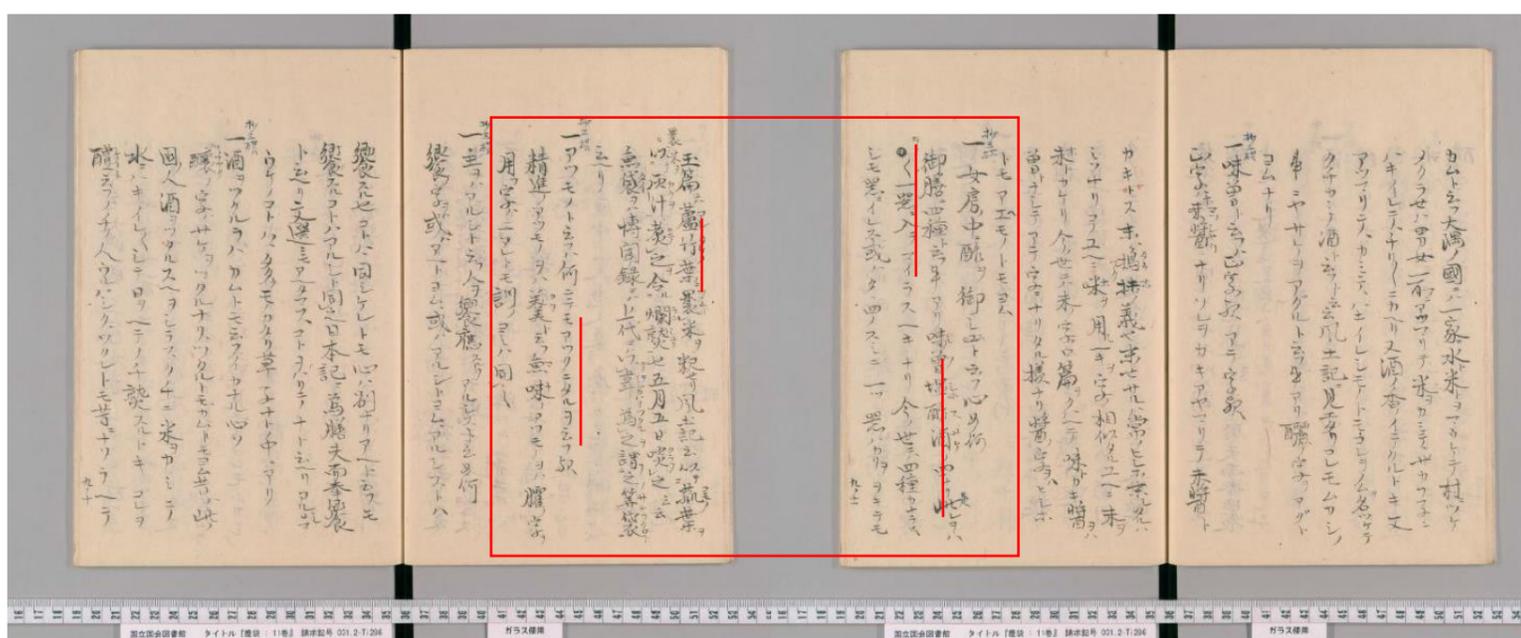
江戸時代の年貢米の輸送にはいくつかのルートがあり、輸送手段や期限、天候などの諸条件から、どのルートを利用するかを選択がなされた。

内川廻しルートは陸送部分の効率の悪さが課題だったため、新ルートの開拓などが盛んに行われた。

酒造の始まり

近世以降の石岡において最も水の恩恵を受けた文化は酒や醤油といった醸造業の発展です。

酒造の歴史は古く，三内丸山遺跡の調査から縄文時代には果実酒作りが行われていた可能性が考えられます。また，日本酒のような穀物を原料とする酒造りは大隈国風土記に記録があるとされ，少なくとも1300年程前には行われていたと思われま



塵袋（写本）11巻 年代不明 国立国会図書館所蔵

鎌倉時代中期の成立といわれる類書（事典のようなもの）で，酒の項で口噛み酒が確認できる。

石岡の酒造の歴史は，伝承では1462年，古文書では今からおおよそ320年前の江戸時代元禄期までさかのぼることができます。

酒造りに必要なものは，原料の米，良質な水，そして道具や醸造権を得るための財力です。石岡周辺は常陸国風土記に書かれている通り実り豊かな地域であり，また霞ヶ浦水運の拠点なので原料が集まり，常陸府中藩の陣屋があったので武士層に支給された米も市中に出回りました。水に関しても府中六井の伝説に見られるように恵まれていました。そして霞ヶ浦水運や市の開催などにより経済が発展し財力もありました。条件のそろった石岡周辺は酒造好適地として急速に酒の町として発展しました。

石岡の自然と酒造り

石岡で酒の醸造が盛んになった理由には、石岡周辺の地質や環境が大きく影響しています。

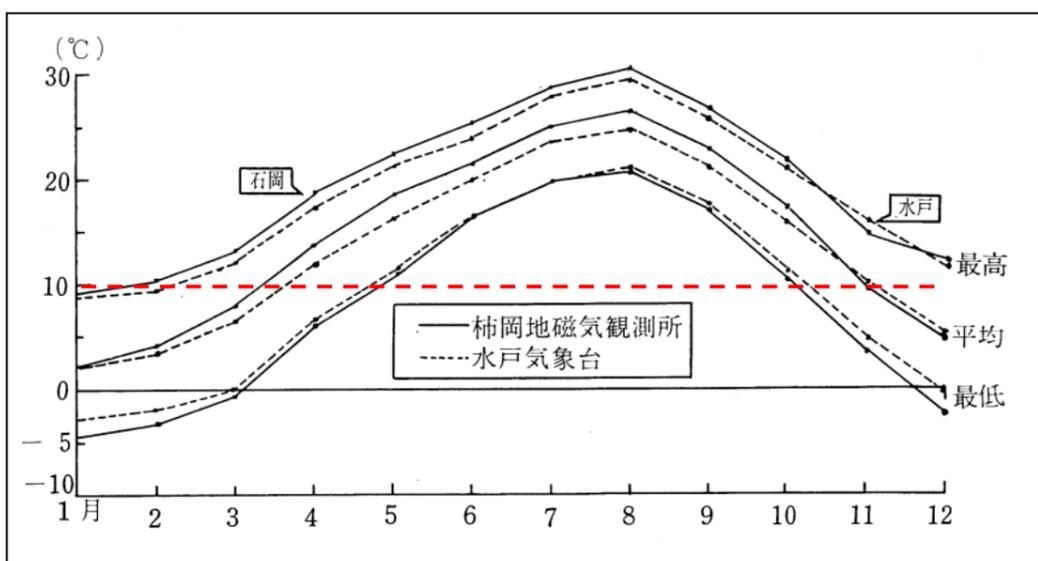
酒の醸造では水が非常に重要です。水質として鉄分や有機物を含むものは嫌われ、酵母の繁殖に適したミネラルの豊富な硬度の高い水が求められます。江戸時代に酒の一大産地となった灘も、『宮水』と呼ばれる硬度の高い水があったことから酒造業が発展しました。

石岡も灘と同じく醸造業に適した水質でした。この理由は筑波山系にあります。筑波山系は花崗岩質です。山に降った雨は花崗岩の間をゆっくりと浸透し、ミネラル豊富な地下水になります。石岡の井戸からは筑波山が作ったミネラル豊富な水が湧き、美味しい酒や醤油を生み出しました。



筑波山系に降った雨は岩の割れ目からしみ込み、ミネラル豊富な地下水となる。

また、気候も醸造業に適していました。冬の石岡には「筑波おろし」と呼ばれる強風が吹き、寒冷な気候となります。江戸時代には当然冷蔵庫はありません。酒の味や色を守るには、冷蔵庫のように寒冷である必要がありました。



石岡市の平均気温 石岡市史下巻. 1985, p. 4
石岡市（合併前）の月ごとの平均気温は、11月から3月にかけての冬場は10°C以下になる。
この寒冷な気候が腐敗菌の活動を抑制する冷蔵庫の役割を果たした。

酒造の価値



いくらあれば始められた？

酒造業を始めるために必要だった資金については、いくつかの史料に見ることができます。

貞享2年（1685）に書かれた『酒林譲渡証文』では、酒造株、蔵、諸道具を合わせて金80両で譲渡されています。また、元禄2年（1689）の『売渡シ申酒株之事』では酒造株や道具を金100両で譲っています。これらの史料から、当時の酒造の価値がわかります。

江戸時代中期の頃の経済状況で、80両がどれほどの大金だったのか見てみましょう。江戸時代の庶民の大半は農家です。江戸時代中期の農家の収入に関しては、“地方の聞書”という史料から知ることができます（近世地方経済史料 第2巻、近世地方経済史料刊行会、1932、p.400-431）。奉公人を5人雇っている大農家の場合、生活費などを差し引くと、年間の利益は銀21匁5分になります。江戸時代中期の金銀交換率は金1両＝銀60匁なので、金0.3両ほどの利益だったことになります。このことから酒造を始めるには強力な経済基盤が必要だったことがわかり、同時に酒造りを行う家が何軒もあった近世石岡の繁栄ぶりが伺えます。

農家の収支表 地方の聞書から作成

・収入 銀 1538 匁

種類	金額（銀換算）	備考
米	698 匁	収穫 2250 匁
		年貢等税金 1302 匁
		肥料代 250 匁
夏麦	720 匁	収穫 920 匁
		肥料代 200 匁
蕎麦	120 匁	収穫 120 匁

・支出（年中入用） 銀 1516 匁 5 分

種類	金額（銀換算）	備考
食費	760 匁 4 分 1 厘	米・麦・菜・塩・味噌・茶
燃料費	159 匁 7 分 5 厘	薪・油
賃金	385 匁	奉公人 5 人分
被服費	99 匁 4 分	
道具損料	107 匁 4 分	からすき・くわ・牛等

* 支出は個別額と合計額が一致しないが、史料記載のままとしている。

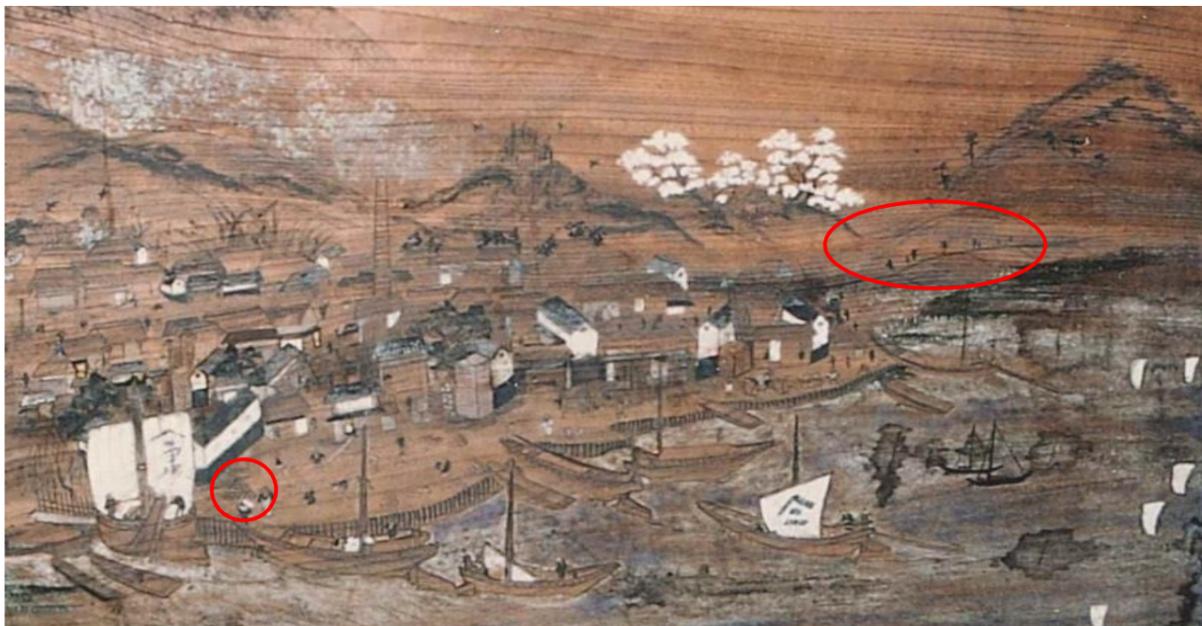
醤油造の始まり



近世石岡では、酒と並んで醤油も作られていました。醤油醸造業の開始は、17世紀前葉から中葉ごろと伝えられています。

石岡で醤油醸造業が盛んになった理由には、酒造業と同じく水質に恵まれていたという点が挙げられますが、もう一点、霞ヶ浦水運の存在があります。

醤油の原料は麦や大豆です。江戸時代の霞ヶ浦沿岸の農村はこれらの作物の主要な産地でした。霞ヶ浦沿岸部で作られた作物は舟で運ばれます。高浜は古代から霞ヶ浦水運の主要な港として発展しており、近世でも近隣の村で作られた農作物が集められる拠点の1つとして機能していました。原料を手に入れやすかったことから、醤油造りが始められたのです。



高浜神社奉納絵馬には高浜に集まる俵やそれらを取る蔵、町に集まる人々の様子が描かれている。

霞ヶ浦水運の拠点での醤油醸造業の展開は土浦や佐原などでも見られ、醤油生産地と霞ヶ浦水運の関係は深い。

石岡の醤油は主に水戸方面で販売されました。その様子は『日本醤油業界史』に書かれており、江戸時代後期の水戸では石岡の醤油が大量に入ってくるため地元の醤油醸造業が発展しないとあります。他地域を圧倒するほど流通していたことから、石岡の醤油の勢いがわかります。

近代石岡と醸造業

近世石岡で始まった酒・醤油の生産は明治維新以降も発展を続け、石岡の基幹産業になりました。明治14年の茨城日日新聞の記事では「石岡町の名産は酒及び醤油を以て第一とする両醸家は三十四五、酒造高凡そ六七千石、醤油造高凡そ五六千石、酒税凡そ八九千円なり」とあり、醸造業が石岡を代表する産業であったことがわかります。

種類	数量 (石)	金高 (円)
清酒	8,308	456,940
醤油	6,080	139,840
製糸	4,590	250,560
米	11,014	109,954
大麦	5,400	24,300
小麦	2,340	18,720
大豆	2,380	21,420

表.石岡町重要生産高 (明治42年)

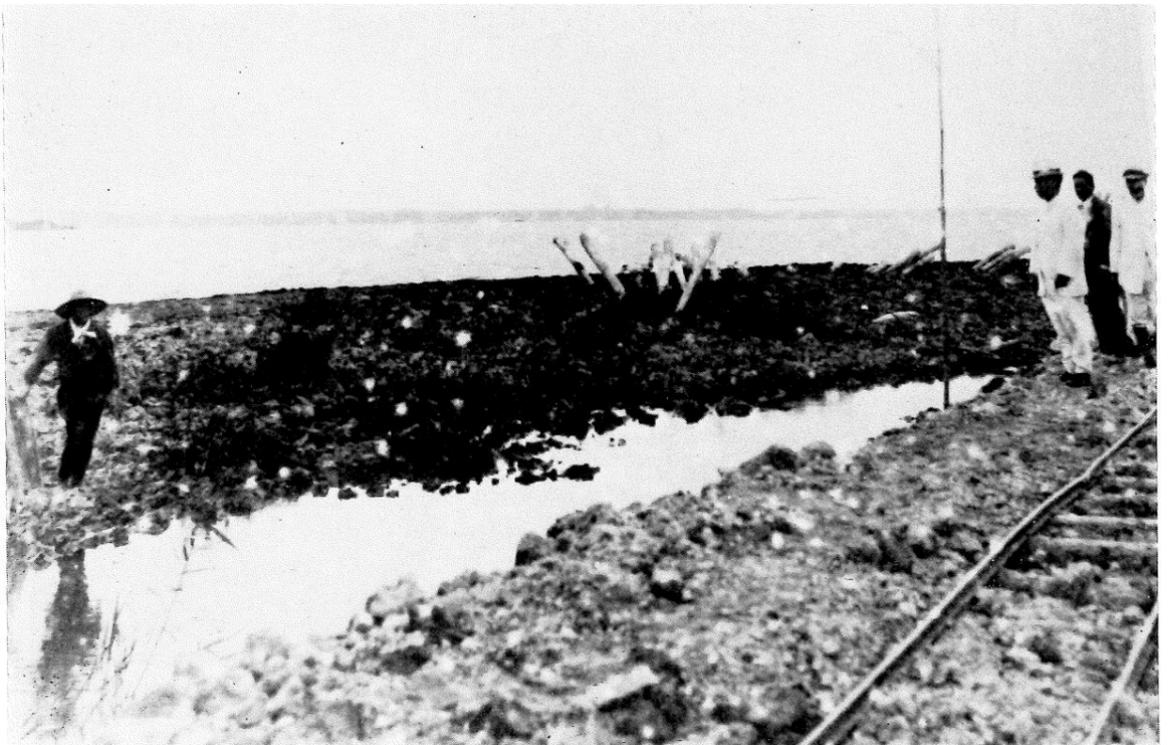
『石岡市史・下巻』より作成

ことがわかります。

右の表は明治42年の石岡における主要な生産物の生産量をまとめものです。この表から、明治末期の石岡において酒・醤油の生産量が圧倒的に多かったことがわかります。

醸造業は石岡の経済を支える大黒柱であり、近代石岡を作る原動力となりました。

右の写真は八木の干拓工事です。醤油醸造家の一人、羽成卯兵衛は、私財を投じて霞ヶ浦最初の干拓事業を行いました。羽成卯兵衛に限らず、多くの醸造家が石岡の発展のために尽くしました。



八木の干拓工事の様子 石岡の歴史. 1984, p. 213

近代石岡の発展を支えた醸造家



大きな利益を生んだ醸造業は、その利益によって交通網の整備や干拓事業を行ったり、あるいは災害が起きれば被災者のために尽力したり、政治家になり県政の発展に努めるなど、様々な形で石岡の発展を支えました。

村田宗右衛門（三代目）

天保14年（1843）～明治34年（1901）

酒・醤油の醸造で巨万の富を築く。

山林の開墾を行ったり、大火の際には被災者のために無償でバラックを貸し出すなどした。



金子源兵衛

嘉永7年（1854）～明治37年（1904）

家業は醤油醸造業であり、県下随一の生産額を誇った。

政治に関心を持ち、明治33年から37年まで県議会議員を務めた。

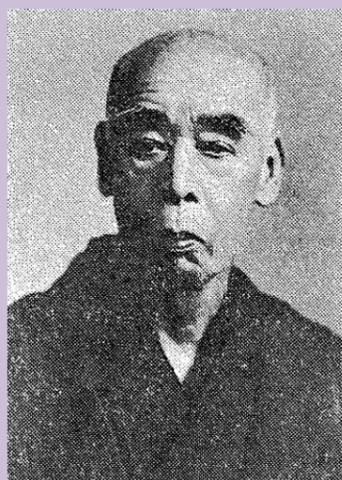


広瀬慶之助

慶應元年（1865）～昭和14年（1939）

家業は酒造業で、父は道路改修や高浜神社の修復に貢献した。

自身は火力発電所の設置や干拓事業を行い、高浜地区の発展に尽力した。



羽成卯兵衛

明治6年（1873）～昭和9年（1934）

家業は醤油醸造業であり、高浜農商銀行取締役や高浜町議会議員を務めた。

また、私財を投じて八木の干拓を作り、高浜地区の発展に尽くした。



現代の醸造業



近世近代と石岡経済の中心だった醸造業ですが，徐々にその勢いを失っていきます。

明治時代末期には県内最大の生産量を誇った石岡の醤油ですが，大正時代以降，急激に衰退してしまいました。その理由は，輸入大豆の流入で原料が手に入りやすいという地理的優位性がなくなったことや，東京方面に積極的に進出しなかった広告戦術の失敗が挙げられます。

酒造業に関しても同様の傾向が見られ，茨城県内では多くの銘柄が人気を得ていましたが，東京方面へは積極的には売り出されませんでした。

その結果，酒・醤油ともに多くの醸造家が地域メーカーの域を出られず，廃業してしまいました。

しかし，美味しいお酒は石岡市の特産品として楽しむことができます。大人の方はこの機会にジオの恵みを味わってみてはいかがでしょうか。

町村名	醸造家	造石高
土浦町	9	1728.065
真鍋町	2	982.313
上大津村	1	64.881
佐賀村	3	97.369
志土庫村	1	1864.891
関川村	1	20.204
高浜町	2	1383.136
石岡町	14	6256.638
瓦会村	1	63.164
恋瀬村	1	43.157
柿岡町	4	307.367
都和村	2	71.447
藤沢村	3	3230.760
栄村	1	244.706
九重村	1	63.818
中家村	1	65.884
合計	47	16496.800

新治郡醤油造石高表（明治42年度）

新治郡是. 1913, p. 181-183 から作成

町村名	醸造家	造石高 (清酒・濁酒・焼酎合計)
土浦町	1	157
真鍋町	1	54
下大津村	1	9
佐賀村	2	186
関川村	2	366
高浜町	1	2099
石岡町	12	8738
瓦会村	1	495
柿岡町	3	905.2
都和村	2	380
栄村	1	288
合計	29	13677.2

新治郡酒類造石高表（明治42年度）

新治郡是. 1913, p. 179-180 から作成

石岡市立ふるさと歴史館第10回企画展パンフレット

水が作った石岡

平成29年5月2日発行

発行／石岡市教育委員会

編集／石岡市教育委員会文化振興課

〒315-0195 茨城県石岡市柿岡5680-1

Tel 0299 (43) 1111 (代表)